

まえがき

我々の日常生活に深く関わっている言語は、長い間、人々の興味関心を引きつけてきた。実際、言語に関する研究は、文学や哲学など様々な学問分野において広く行われており、決して言語学の専売特許というわけではない。しかしながら、言語学は、言語それ自体を科学的に研究することを目指している経験科学の一分野であるということを自認している点で、他の分野とは一線を画している。

ところが、従来の言語学では、研究の科学性やそれを支える客観性を重視するあまり、言語の主観的側面に関する言及を避けようとする傾向があった。実際、意味の分析に関しても、命題の真理値に関わる意味だけを扱う客観的意味論や形式的な論理記号を用いた記述を目指す形式意味論などが主流となっていた。そのため、事態に対する話者の捉え方など、言語現象に深く関わっている話者の主観的な側面が研究の中心となることは少なかった。

このような状況の中で、言語が表す意味について真摯に研究を続けてきた一部の研究者の中から、言語研究においては話者による主体的な関わりを避けて通ることはできないとする立場が現れてきた。例えば、Lakoff and Jonson (1980) では、命題の真理値に基づく客観的意味論では扱うことのできないメタファーが単なる修辞上の問題ではなく、言語や思考に深く関わっていることが示された。そのような動きの中で、言語の意味、とりわけ主観的側面に注目した認知言語学 (cognitive linguistics) という新しいパラダイムが誕生した。

このような背景から、認知言語学は言語の主観的な意味のみを扱う理論であるという誤解を招くことが少なくない。実際、認知言語学は意味論であるにとらえている研究者もいるくらいである。しかしながら、そのようなとらえ方は認知言語学に対する正しい理解とはいえない。本書は、そのタイトルが示しているように、認知言語学の観点から書かれた統語論 (syntax) に関する研究書であり、認知言語学の射程は、意味に限らず、音韻、形態、統語など、言語に関連するあらゆる側面に及ぶ。実際、認知言語学の流れを興し、けん引してきた George Lakoff や Ronald W. Langacker らの研究者たちは、これまで言語の意味だけを扱うと宣言としたことは一度もなく、認知言

語学の学問的前身である生成意味論 (generative semantics) の時代から、絶えず形式と意味の両面から言語現象を捉えることの必要性を説いてきた。認知言語学では、統語現象を意味から切り離された純粋な形式的記号操作とみなさないだけなのである。

生成文法 (generative grammar) を代表とする従来の統語論は、ある言語の語と語、句と句、文と文などを合成して無限の新しい文を生成する有限個の統語規則、ないしは統語上の原理を解明することを目的としている。これに対して、認知言語学では、統語現象をそのような統語規則や原則に従った記号の演算操作の一種とはみなさない。認知言語学では、文法 (統語論を含む) は、コミュニケーションの現場において、ヒトが長い年月をかけ外的環境と身体との相互作用を通して発達させてきた記号体系であるとみなす。これは従来の統語論や文法を純粋な形式的記号演算操作とみなす多くの言語理論と根本的に異なっている点である。

このような言語観に立つため、本書では、領域固有な言語能力を前提とせず、人間の一般的な認知能力とそれを用いる認知主体の概念化 (conceptualization) の観点から統語現象の記述と説明を試みる。本書でこれから詳述する認知言語学のパラダイムは、言語を自律した閉じた系とはみなさず、人間の脳と身体との進化の結果として創発した認知能力の発現としてとらえている。そのため、一般的な学習のメカニズム、環境と相互作用しつつ認知主体が作り上げる身体感覚と世界に関する知識、他者との協働やコミュニケーションを通して作り上げる共同体や社会制度など、地球という環境に適応しつつ進化を積み重ねてきた生物としてのヒトの持つ特性を注意深く検討しながら研究を進める。そのため、常に他の研究領域と行き来しつつ言語の本質に迫るアプローチをとる。認知言語学のアプローチは、他の領域の研究と密接にコミュニケーションをとりつつ行われる開かれた研究なのである。

したがって、本書をいわゆる言語学、しかもその下位分野である統語論という狭い範囲に特化した研究であるととらえてはならない。意味論、語用論などの従来からの細目にはとらわれず、領域横断的、学際的に研究を進めることが認知言語学のパラダイムだからである。したがって、本書で取り扱う統語現象、文法現象の分析は、認知言語学の道具立てを用いた単なる言語分析としてではなく、言語学を超えたより広い視点から動機づけされなければならない。つまり、人間の脳や身体が環境との相互作用の中で獲得してきた認知能力と、そのような認知能力を用いて作り上げてきた文化や慣習として

の言語体系を記述し説明しなければならないのである。その意味で、本書は、従来の統語論の研究書とは一線を画しているといえる。

本書では、そのような認知言語学的なアプローチが日本語および他言語の文法現象の分析、説明にいかにも有効であることを示すことを目的とする。その際、認知言語学の中でも特に Ronald W. Langacker の提唱する認知文法の枠組みを用いて日本語および他言語の文法現象の分析を試みる。

本書は全6章で構成されており、第1章、第3章、第4章、第5章、あとがきを町田が、第2章を木原が、第6章を小熊・井筒がそれぞれ担当した。

第1章では、認知文法の基本的な考え方と記述に用いられる道具立てについて概観している。特に、認知文法では、言語表現の意味を言語を使用する認知主体の概念化とみなし、そのような概念化には概念内容だけでなく認知主体による事態の捉え方が反映されていると考える。また、認知主体の経験から立ち現れるプロトタイプカテゴリーをなす概念原型と認知主体の認知能力から発現する抽象的なスキーマによる文法カテゴリーの規定も行われ、経験基盤主義に基づいた言語分析の道具立てを概観する。そして、このような考えに基づき図式を用いて言語現象を具体的に記述する方法も例示する。

続く第2章では、認知言語学における構文の概念と分析手法を外観し、文を超え談話も含めた上で構文をどのように分析記述できるかをケーススタディを挙げながら確認する。まず2.1節では Goldberg (1995) の構文観とその記述手法の限界点を挙げ、2.2節では認知文法の構文観の方が射程が広く、レキシコンからシンタクスの連続性もシームレスに捉えられることを示す。2.3節では文を超えて談話も構文分析の対象となりうることを述べ、2.4節では英語学習者の談話を響鳴の観点から分析することで情報構造が学習者にどのように理解し運用されるのかを議論する。最後に、Goldberg (2019) で示された新しい構文観を示し、認知言語学における構文分析がさらなる発展を遂げることが期待されることを確認する。

第3章では、日本語の文法を分析する上では欠かせない主観性・主体性の問題を取り上げる。一般に、日本語では話し手が主語になる場合には、主語が“省略”されることが多く、これが日本語の主な特徴の一つであると言われている。同章では、このいわゆる主語の“省略”は、英語などの代名詞とほぼ同じ働きをするゼロ照応と認知主体の主観的な事態把握の様式である事態内視点に動機づけられたものの二種類に分類されるとしたうえで、後者に焦点を当てその認知メカニズムについて詳しく検討する。その上で、間主観

性の観点から日本語らしさを生み出す要因について議論する。

第4章では、新たな言語表現を脳内で作り出すメカニズムを解明するために文の構造を詳細に検討することの重要性を確認したうえで、認知文法の構造記述の方法、および考え方について概観する。その上で、4.2節以降で、日本語文法の記述には欠かせない格助詞の概念的規定について検討する。特に、プロトタイプの規定だけでなくスキーマの規定が必要なガ格、ヲ格、ニ格については、それぞれスキーマ的規定を行い、客体化に伴う格助詞のゆれについても考察する。

第5章では、日本語のラレル構文を例に挙げて構文拡張の認知メカニズムについて議論する。日本語のラレルという形式には、受身、自発、可能、尊敬という四つの用法があるとされているが、これらを統一的に扱った研究は少ない。実際、多くの研究では、一つの用法だけに研究対象が限定されており、他の用法との関係が不明のままである。本章では、コントロールサイクルという認知モデルを足がかりに、ラレルという形式とそれに対応する複数の意味を明らかにし、構文のネットワーク構造を明らかにする。

第6章では、認知言語学においても統一的な特徴づけを与えるには至っていない最も広い意味でいうところの従属節を認知的・談話機能的観点から扱う。分析に当たっては、主節性を欠くものといった消極的に位置づける立場を採らず、「概念的埋め込み (conceptual embedding)」という観点から特徴づけられることを示す。各論として、6.3節で日本語・韓国語・アイヌ語の関節と関連従属節、6.4節で日本語のテ形もしくは連用形を主要部とする従属節および英語・韓国語・アイヌ語の相当表現、6.5節で日本語・英語・チベット語・韓国語の疑問等の埋め込み文に見られる特異な現象を取り上げ、それらに対して認知的・談話機能的説明を中心に先行研究を紹介し、それらの問題点を素描しつつ認知言語学的代替案を提案する。

あとがきでは、各章では十分に扱うことができなかった認知文法の今後の展開の可能性と方向性について触れる。2010年代に入ってLangackerは、精神的に従来の理論のさらなる深化を行うとともに新たなアイデアの提案を行っているが、その中のいくつかをその意義とともに簡単に紹介する。

最後に、本講座の責任編集者の山梨正明先生および編集者の吉村公宏先生、堀江薫先生、初山洋介先生には執筆の機会を頂いたことに心から感謝いたします。特に、山梨先生には、ご助言および叱咤激励を通して、なかなか執筆の進まない著者たちを温かく見守っていただきました。記して感謝の意

を表したいと思います。また、くろしお出版編集部の池上達昭氏には出版までの様々な面でご尽力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

町田 章
木原恵美子
小熊 猛
井筒 勝信

目次

認知日本語学講座・刊行にあたって iii

まえがき v

第1章 認知文法の基本概念	1
1.1 はじめに	1
1.2 形式と意味	2
1.2.1 記号的文法観	2
1.2.2 捉え方	3
1.2.3 詳述性	5
1.2.4 焦点化	6
1.2.5 認知的際立ち	7
1.2.6 視点	9
1.3 用法基盤モデル	12
1.3.1 レキシコンと文法の連続性	12
1.3.2 言語使用イベント	14
1.3.3 ネットワークモデル	18
1.4 概念原型と認知能力	21
1.4.1 概念原型	21
1.4.2 認知能力	25
1.4.3 参照点能力	28
1.5 理論内基準	34
1.5.1 内容要件	35
1.5.2 収束的証拠	35
1.5.3 内容要件と収束的証拠の意義	36
1.5.4 記述と厳格さ	38
1.6 まとめ	40
第2章 構文分析における主要モデル	43
2.1 はじめに	43
2.2 Goldberg の構文文法	47

2.2.1	構文の定義	49
2.2.2	動詞の意味と構文の意味	51
2.2.3	構文ネットワーク	54
2.3	Langacker の認知文法	57
2.3.1	構文の概念	57
2.3.2	語の意味と構文の意味	65
2.3.3	構文ネットワーク	69
2.3.4	Langacker と Goldberg (1995) のモデルの相違点	73
2.4	レキシコンから談話への連続性	80
2.4.1	語の意味記述の精緻化	81
2.4.2	文から談話への連続性	85
2.5	談話の記述にむけて	97
2.6	まとめ	108
第3章	日本語らしさと認知文法111
3.1	認知文法と日本語研究	111
3.2	非明示的主語の問題	112
3.2.1	言語化されないトラジェクター	113
3.2.2	表現されない自己	117
3.3	主観性と主体性	120
3.3.1	自己把握の様式	120
3.3.2	Langacker の主体性	122
3.3.3	客体化と事態外視点	124
3.3.4	主観性と事態内視点	130
3.4	主観的状况	135
3.4.1	自己中心的視点配置	135
3.4.2	主観的状况と客体化	137
3.4.3	事態内視点の認知主体	144
3.5	間主観性	146
3.5.1	二つの間主観性	146
3.5.2	日本語らしさと同化型間主観性	154
3.6	まとめ	155

第4章 概念の構築と格助詞スキーマ	159
4.1 文法構造の明示的な記述	159
4.1.1 言語の構造依存性	160
4.1.2 認知文法の構造記述	163
4.1.3 身体特性と多次元的认识	167
4.2 格助詞と事態把握	173
4.2.1 認知文法における主語・目的語の規定	173
4.2.2 他動詞構文	178
4.2.3 二種類の節レベルのランドマーク	180
4.2.4 格助詞スキーマ	186
4.3 双方向事態把握	190
4.3.1 知覚の双方向性	190
4.3.2 到達点と起点の二格	194
4.3.3 事態内視点とプロファイル	197
4.4 認知主体の客体化	201
4.4.1 内的状態述語	201
4.4.2 認知主体の明示化と格助詞のゆれ	207
4.5 まとめ	212
第5章 構文拡張の認知メカニズム	215
5.1 受身構文と他動性	215
5.1.1 日本語受身文の特徴	215
5.1.2 他動性による説明	217
5.1.3 他動性に基づく拡張の問題点	221
5.1.4 英語の受身文	224
5.2 ラレル構文の多義性	227
5.2.1 自発	228
5.2.2 可能	231
5.2.3 受身	234
5.2.4 ラレル構文の捉え方	236
5.3 受身と制御領域	238
5.3.1 被害性の出所	238
5.3.2 コントロールサイクル	240

5.3.3	制御領域と局面	247
5.3.4	無情物の受身	251
5.3.5	関連性	256
5.4	ラレル構文のネットワーク	258
5.4.1	意図成就	258
5.4.2	ラレル構文のネットワーク	263
5.5	まとめ	267

第6章 従節性(非主節性)の認知統語論：非主節的統語要素の意味と機能....269

6.1	はじめに	269
6.2	多様な従属節(非主節的統語要素)	270
6.2.1	不分明な統語的機能	270
6.2.2	従属節を支える概念化様式	273
6.2.2.1	概念的埋め込み	273
6.2.2.2	包含, 接近性, 補完, 詳述, 投影	276
6.2.2.3	物象化と非時間化	278
6.3	主格・属格交替と名詞主題：日本語・韓国語・アイヌ語の 関係節と関連従属節	284
6.3.1	日本語の連体修飾節構文	284
6.3.2	いわゆるガ・ノ交替	287
6.3.3	認知基盤：参照点	289
6.3.4	プロトタイプ：『が』関係節, 『の』関係節	293
6.3.5	プロトタイプからの拡張	296
6.3.5.1	形容詞を述部する関係節	297
6.3.5.2	主要部を欠く従属節環境： 比較従属節, 副詞的従属節	298
6.3.5.3	いわゆる主要部内在節	300
6.3.6	韓国語の主格・属格交替類似現象	304
6.3.7	アイヌ語の主格・属格交替類似現象	308
6.4	特異な格標示と発話事象指向性	310
6.4.1	テ形/連用形従属節の特異な格標示	310
6.4.2	動詞補部従属節の格標示	312
6.4.3	テ形従属節の発話時事象的分岐	314

6.4.4	テ形従属節と話者関与性	317
6.5	発話事象概念への埋め込み：日本語・英語・チベット語・ 韓国語の人称標示と『のだ』相当形式	319
6.5.1	発話事象概念の中心主体：只今の話者と次の話者	319
6.5.2	話題となる参加者の人称標示	322
6.5.3	発話・思考内容の力学的概念化	325
6.6	おわりに	328
あとがき—認知文法の展開—		329
参考文献		339
索引		359

第1章

認知文法の基本概念

1.1 はじめに

この本のタイトルが示しているように、本書は統語論 (syntax) について書かれた研究書である。しかしながら、この半ば自明ともいえる統語論という言語学上の概念は、それぞれの研究者が前提とする言語に関する作業仮説によって大きく異なってくる。本書が主に依拠している認知文法 (cognitive grammar) は、他の認知言語学 (cognitive linguistics) の流れを汲む研究と同様に、従来の言語学、特に生成文法 (generative grammar) が前提としてきた統語論の自律性 (autonomy of syntax) を前提としていない¹。そのため、認知文法では、統語論を含む、いわゆる文法は、ことばで表現したいという話し手および聞き手の欲求を満たすために人類が長い年月をかけ環境と身体との相互作用を通して発達させてきた記号体系であるとみなす。これは統語論および文法を形式的な記号の演算操作とみなす多くの言語理論と根本的に異なっている点である。

一般に、統語論と銘打った教科書や授業では、ある言語の語と語、句と句、文と文などを合成して無限の新しい文を生成する有限個の統語規則、ないしは統語上の原理を扱うことを当然視している²。そのような教科書ないし授業では、言語表現を無限に生成する統語能力は、意味からは切り離された純粋な形式上の記号操作能力として位置づけられている。それに対し、本書が採っている認知言語学のパラダイムでは、統語能力はそのような記号操作能力とはみなされていない。人間が進化の過程で獲得してきた一般的な認知能力を用い、長い年月をかけ、環境と相互作用し、他者とコミュニケーション

1 本書では、認知文法という用語を単なる認知言語学的な文法という意味ではなく、Ronald W. Langacker が創始した枠組みとしての一連の文法理論を指すことにする (Langacker 1987a, 1990, 1991, 1999a, 2008a, 2009a, 2016a, 2017a)。

2 一般に、このような創造性を規則に基づく創造性 (rule-governed creativity) と呼ぶ。

第2章

構文分析における主要モデル

2.1 はじめに

構文(スキーマ)には、言語共同体が長い時間をかけて積み重ねた経験や情報が蓄積されており、そのような複雑で豊かな構文に基づいて言葉は使用され理解される。言語表現の運用と理解に必要な構文が認知主体に習得されなければ、構文の解釈だけではなく、統語形式そのものも適切に認知されないことも起こりうる。そのため、言語の運用と理解には構文の統語的知識だけではなく構文の学習と習得も欠かせない。

そのような構文について具体的に確認する前に、言語理解における構文の重要性を筆者の人生初のイギリス出張での出来事を例に挙げて紹介する。日頃からアメリカ英語やアメリカ文化に接することが多い筆者は、第13回国際認知言語学会(2015年7月20-25日開催)に参加するために、緊張しながらロンドン・ヒースロー空港に降り立った。入国審査の長い列に並び、自分の番が来るのを1時間ほど待った。ようやく審査を終え、ロンドン市内行きの特急電車ヒースロー・エクスプレスに乗り、終点パディンドン駅で降り、宿泊先のホテルに一番近い出口を探した。筆者は大阪市内育ちの地図が読めない女なので、町に出たらまずは標識を探し、標識に従って歩く。しかし、パディンドン駅構内で5分以上歩き回っても写真1のような出口標識も、出入口らしき人の流れも見当たらなかった。



写真1

第3章

日本語らしさと認知文法

3.1 認知文法と日本語研究

生成文法をはじめとする従来の統語論では、統語の自律性を前提とすることが多い。それに対し、認知言語学では、領域固有の自律的な言語能力を前提とせず、人間の一般的な認知能力とそれをういた認知主体の概念化の観点から統語現象の記述と説明を試みる。当然、そのような一般的な認知能力は人間に共通の普遍的な能力であるため、形態素レベルから語彙レベル、統語レベル、談話レベルに至るすべての言語現象の中に通言語的にも通時的にも反映されているはずであり、生成文法と同様、ある種の普遍性の追求を行うことになる。

しかしながら、認知言語学における統語論を、無限個の可能な文を生成する有限個の規則や原理からなる普遍文法と言語の多様性を生み出す一連のパラメーターの集合を明らかにする研究であると捉えてはならない。特に、従来の統語論では見過ごされてきた表現の意味や認知主体の意図など、意味論・語用論で扱われてきた問題に細心の注意を払いながら構文という形式と意味の対応関係を見ていかなければならない。その際、形態素や単語などの文を構成する要素の意味、構文の意味、文脈における位置づけ、話し手・聞き手の役割など、言語使用イベント (usage event) においてコミュニケーション成立に関わっているすべての要素に注意を払う必要がある。決して、従来の統語論のように言語使用イベントから切り離された文の形式的特徴だけを追えばよいというわけにはいかないのである。

このような前提に立つ認知文法は、これまで英語を中心に精力的に研究を行ってきた (Langacker 1987a, 1990, 1999a, 2008a, 2009a)。そして、このようなアプローチの有用性は、英語以外の言語においても広範に示されている (cf. Langacker 1990: Chap.2, 2002a; 楊 2017; 王 2013)。もちろん、日本語文法研究においても、認知文法的なアプローチを用いた研究は盛んになされて

第4章

概念の構築と格助詞スキーマ

4.1 文法構造の明示的な記述

一般に統語論は、単語 (word) をどのように合成して句 (phrase) を作り、句をどのように合成して節 (clause) を作り、節をどのように合成してより大きな節、つまり文 (sentence) を作り上げるか、その際の脳内の生成メカニズムを明らかにしたり、そのようにして生成された文の構造を記述したりすることを主な目的としている。

その一方で、認知言語学的なアプローチをとる研究者たちの間では、上記のような統語論の目的はあまり受け入れられていない。それは、従来の統語論が意味や文脈や実際の言語使用を無視した話者不在の言語観に基づいていたため、日常の生きたことばとはかけ離れた分析を行っているように見えるからである。

しかしながら、以下の引用で Langacker も指摘しているように、認知文法においても上記の目的が放棄されているわけではない。実際、(1a) では、脳内で言語表現が作り出されるメカニズムを明らかにすることが第一の目的であることが明確に述べられており、(1b) では、言語の構造を明示的に記述するという目的は形式的アプローチと変わらないと述べられている。

- (1) a. ...we have to recognize that the primary target of generative description does exist... (Langacker 1999b: 18)
- b. CG (=Cognitive Grammar) shares with formal approaches the commitment to seeking explicit characterizations of language structure. (Langacker 2008a: 8)

注意しなければならないのは、風呂桶の湯と一緒に大切な赤ちゃんを捨て

第5章

構文拡張の認知メカニズム

5.1 受身構文と他動性

本章では、文法構文研究の中でも常に注目度の高いテーマである日本語受身文を取り上げ、認知文法の枠組み内でどのような説明が可能であるのかを検討する。

5.1.1 日本語受身文の特徴

一般に、日本語受身文は様々な異なる観点から分類されており、分類する観点によって、分類体系が異なっている¹。例えば、形式的な観点からは、直接受身 (direct passive) と間接受身 (indirect passive) に分類される。直接受身とは、(1) に示すように対応する能動文がある受身文のことをいい、間接受身とは、(2) に示すように対応する能動文がない受身文のことをいう (cf. 高見 1995: 83-84)。

- (1) a. 太郎が花子に褒められた。 【直接受身】
 b. 花子が太郎を褒めた。
- (2) a. 僕が雨に降られた。 【間接受身】
 b. *雨が僕を降った。

それに対し、意味的観点から分類した場合、中立受身 (neutral passive) ・被害受身または迷惑受身 (adversative passive) に分類されることもある (cf. 高見 1995: 82-83)²。受身文で表現した際に、対応する能動文には見られ

1 日本語受身文の分類に関しては膨大な研究の蓄積があり、しかもそれらは複雑に関係しあっているため、残念ながら、ここでそれらすべてを整理することはできない。この膨大な研究の体系的な理解には川村 (2012: 2章) が非常に有益である。

2 本章では、被害性 (adversity) を問題とするため、被害受身という用語に統一すること

第6章

従節性（非主節性）の認知統語論

非主節的統語要素の意味と機能

6.1 はじめに

文の構造について論ずる際、いわゆる主節 (main clause, matrix clause) に付随する別の文的 (sentence-like) もしくは節的 (clausal) な要素は、一般に従属節 (subordinate clause) と呼ばれ、時制 (tense)・人称標示 (person marking)・法 (mood)・法性 (modality)・発話内行為 (illocutionary force) といった主節的な特徴を程度の差こそあれ欠くものとして扱われてきた (Foley and Van Valin 1984; 南 1993)。端的に言えば、従属節は、従来の統語的な研究で、いわば主節と比べて不完全 (incomplete) もしくは欠格的 (defective) なものとして特徴づけられるのが普通だったということである。

しかし、従属節にも主節に特有の文法的な振る舞い (“main clause phenomena”) が生じること (Hooper and Thompson 1973; Green 1976)、従属節と呼ばれるものの中にも節的 (clausy) あるいは名詞的 (nouny) な性質に段階性が見られること (Ross 1973) などが機能主義言語学や語用論的研究の早い段階で指摘されており、それらを継承する認知言語学において主節性と従節性は二者択一的な概念ではなく、段階性を示す意味形式的な特徴と考えられている。中でも Langacker (1987a, 1991, 2008a) に代表される認知文法においては、主節・従属節と呼ばれる統語的要素にこうした段階性を見る態度が顕著であり、Langacker (2014b) は後で概観するように従節性に関してある意味で最も急進的な見解を提示している。

ところが、こうした従来の統語研究に広く流布する伝統的な見方に対して先鋭的な再考察を試み、新たな分析を提案してきた認知言語学においても、従属節もしくは広く「非主節的統語要素」とみなし得る要素に積極的な特徴づけを与えるには至っていない。それらの要素を主節に比して不完全ないしは欠格的なものとして捉えることは、あたかも「状態性 (stativity)」を「動